

こま ひめ 駒姫のこと

「お伊満（お今の方・お伊万の前）」ともいわれます。

最上義光の2女（末の娘ともいわれる）で、東日本で一番きれいなお姫さまとして、評判だったそうです。

豊臣秀吉のあとをついで関白になった豊臣秀次が、そのうわさを聞いて、ぜひ側女にしたいと所望しました。

義光はもちろん承知しませんでした。しかし、時の権力者である秀次から何度も何度も催促されては、ことわりきれません。とうとう駒姫を京都につれて上りました。

ところが、ちょうどそのころ、秀次はむほんをたくらんだという疑いをかけられ、豊臣秀吉の命令で高野山におくられ、切腹させられてしまいます。（文禄4 / 1595年7月15日）

さらにその後、同じ年の8月2日には、秀次の家族や仕えていた女性たち30数人が京都の町中を引き回され、三条河原で打ち首にされるという、むごい事件がおきてしまったのです。

そのなかに駒姫も入っていました。

義光は、八方手を尽くして、かわいい娘の命を助けてくれるようにと、秀吉にたのんだのですが、聞き入れてもらえず、駒姫はついに殺されてしまいました。年齢は15歳だったと言われていますが、ほんとうにかわいそうな運命でした。

後に、関ヶ原の合戦の時、義光が豊臣方につかなかったのは、このときの恨みがあったからだという人もいるくらいです。

山形市の寺町に大きな伽藍をほこる専称寺があります。この寺は、愛する娘駒姫の菩提をとむらうために、義光が天童市の高掬から移した寺だといわれています。

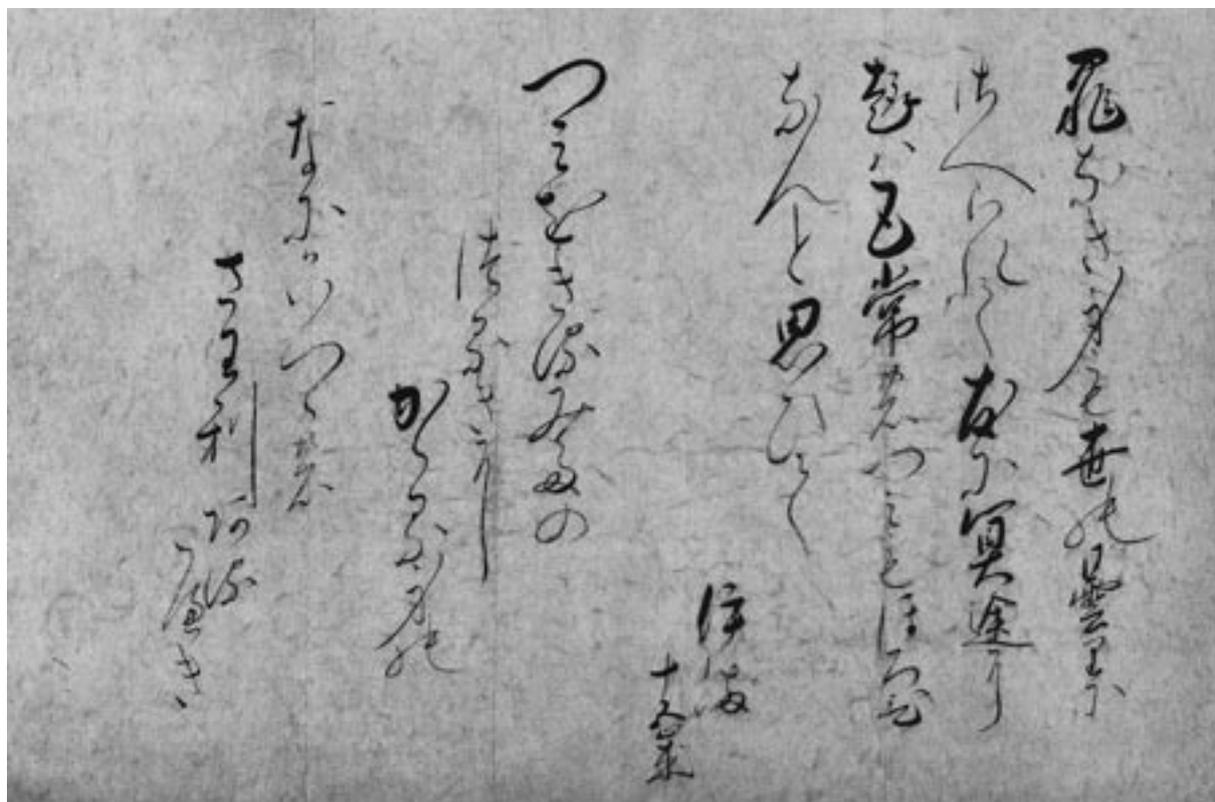
この寺には、駒姫の居間だったといわれる山形城内の建物も移され、今も古いおもかげが残っています。

また、京都三条大橋の西にある瑞泉寺には、秀次のお墓を中にして駒姫ら悲運の女性たちのお墓が立ちならび、御影や辞世の和歌などが大切に伝えられています。



専称寺本堂（山形市指定有形文化財）

こまひめ じ せい わ か かい し
駒姫辞世和歌懐紙



原本 京都・瑞泉寺蔵

駒姫が最期の時に詠んだ和歌です。

(わかりやすく漢字になおしたところもあります)

罪なき身も世の曇りにさへられて

友に冥途に赴(か)ば

五常のつみもほろひなんと思ひて

伊満 十五歳

罪を斬る 弥陀の剣に かかる身の

なにか五つの 障りあるへき

前半は詞書と言って、和歌を詠んだ時の気持ちを書いた
ものです。およその意味は、

罪のない身でありながら、世間から疑いをかけられて
みんなとともに冥土に行きます。

そのことによって、人が行くべき五つの道に背いた罪
も、消えるだろうと思って歌を詠みます。

和歌の意味はつぎのようなことです。

罪を切り払って下さる慈悲深い阿弥陀様のおぼしめし
によって、刃にかかる私ですから、極楽に行くのに妨
げになるような罪などあるはずがありません。